

ワーカーズ

http://www.workers-net.net/
mail workersnet@workers-net.net

毎月1日発行 1部150円 半年1000円(郵送)
郵便振替 00180-4-169433 (ワーカーズ社)

2019/11/1 600号



今号の内容

- ・それでも消費税は悪税だ——「消費税コミコ論」の迷言—— ②③
- ・読書室 『マルクスとエコロジー——資本主義批判としての物質代謝論』 ④⑤
- ・読書室 『植民地朝鮮と日本』 ⑤⑦
- ・なんでも紹介……ノモンハン・南京・桂林 ⑦⑨
- ・エイジの沖縄通信・NO67 ⑩
- ・コラムの窓…… ⑪
- ・読者からの手紙 ⑫
- ・色鉛筆…… ⑫

戦争する国目指す安倍9条改憲を阻止しよう 国民投票法を改憲案とともに葬り去ろう！



6月の参院選の結果、参院での改憲勢力3分の2以上という条件を失った安倍首相は、改憲に向けて新たに巻き返しの動きを強めている。

「理想を議論すべき場こそ憲法審査会」「国民への責任を果たそう」などと言い、党改憲推進本部長に細田博之、衆院憲法調査会長に佐藤勉を充てて野党を引き込もうとしている。

また党政調会長の岸田文雄に改憲もテーマとする地方政調会の全国展開の指揮を執らせ、党幹事長の二階俊博に野党合意の詰め役を担わせるなど、全党挙げての改憲シフトを敷いた。

しかし、安倍自民党が掲げる改憲案は、「国民の「理想」とはかけ離れた、海外で武力行使する自衛隊に憲法上のお墨付きを与えること、戦争につながる動きに反対する国

民の声を押さえ付けるなどための緊急事態条項の持ち込みが主な内容であり、労働者・国民には断じて認められないものだ。

これに対し、維新の会は改憲議論に同調する姿勢。公明党も臨時国会で自民党の改憲案を議論しても良いとの態度を表明した。国民民主党も憲法改正議論を進めるという立場だ。

今臨時国会での国民投票法の改正をめぐる闘いが最初の攻防戦となる。資金力のある団体に有利な規定を残したままの改正案は断じて認めなければならない。

自民党の狙いは改正案を通した後、憲法審査会で自民党改憲案を提示することに置かれているが、この思惑を改正案ともども葬り去らなければならない。

それと同時に、憲法を活かす闘いを発展させていくことを重要だ。

私たちは、現憲法の中でまだ十分には実現されていない、平和の理念、民主的諸権利の現実化を求める闘いを、労働者、民衆の日々の闘いとしつかり結びつきながら、大きく前進させていくために闘う。

この闘いの前進を通して、安倍改憲策動を打ち破るために全力をあげ

(治)

それでも消費税は悪税だ！

「消費税「コミコミ論」の迷言」

度重なる台風襲来のせい、10月1日に引き上げられた消費税の影響は、それほど大きくは広がらなかったようだ。とはいえ、消費税の分だけ確実に個人消費力は縮小する。それが消費不況を一層深刻なものにするかどうかは、今後はつきりする。

その消費税、次の解散総選挙の争点に浮上する可能性が高い。れいわ新選組の山本太郎代表が「消費税ゼロ」を訴えた参院選で旋風を巻き起こしたからだ。

そうしたなか、ある「仮説」がメディアに現れた。「消費税「コミコミ論」という「新発想」への転換だという。

◆逆進性は消える？

10月9日付けの朝日新聞「多事奏論」欄で、編集委員の原真人氏が「価格を科学する——消費税「コミコミ」の新発想」というコラムを書いている。

要は消費税も価格現象の一つであり、消費税増税でも所得

増税でも、結果・効果は変わらない、だから消費税増税で大騒ぎする性格のものではない、というご託宣だ。

自公民による三党合意で始まった「税と社会保障の一体改革」を支持し、消費税増税による財政再建を支持してきた朝日新聞、その一論説委員が書いたコラムにいちいち反論するものもどうかと思われる。が、それでも消費税は富者や大企業に優しい、庶民にとつての悪税だとの立場から、反論せずにはいられない。

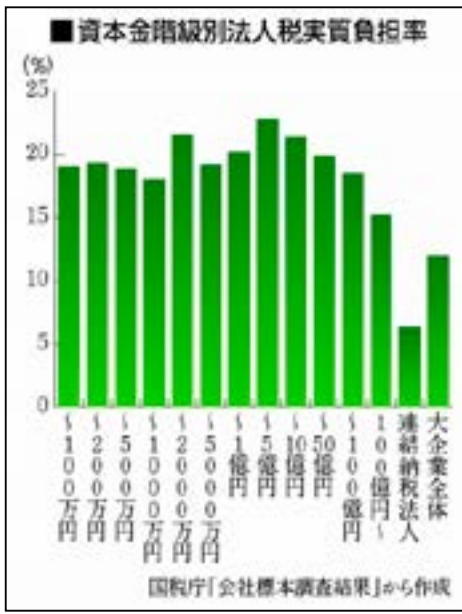
原氏の主張をざっとみていく。原氏はまず今回の消費税増税で、企業や消費者が慎重かつ賢明な選択をした、と評価する。例えば、消費者は極端な駆け込み消費に走らなかつた、企業も、事前に本体価格を変えることで、飲食料品の店内飲食と持ち帰りの税込み価格をそろえて混乱を和らげた……。

こうした事例から、原氏は消費税も「価格の一要素」に過ぎないことがくみ取れる、だからこれまで消費税アレルギラが強い日本での、消費税増税の影響を過大に見る発想は転換が必要だ、というのが前書きになっている。

原氏はさらに続ける。先の参院選で、れいわ新選組の山本代表が、消費税廃止の代替財源として法人税の大増税をあげているが、「だが実は消費税だって事業者がまとめて税務署に納める一種の法人税だ。仮に消費税廃止で生じる財源の穴をすべて法人増税で埋めたとしても、理屈の上では全事業者が納める税総額は変わらない。」「事業者が払うあらゆる税は最終的に何らかの形で消費者に転嫁される。消費者だけが得をする、ということにはならない。」

絶句……。なんとこのくだろるか。最終的に税額を国に納入するのは同じ事業者だから、価格設定次第で誰が負担するかは関係なくなる……ということなのだ。

例えば税の歴史で悪名高い「人頭税」。国民の個人々に一



方では企業の内部留保が膨れ上がり、いまでは全産業で500兆円を超える規模に膨れ上がっている。内部留保は過去7年連続で増えており、安倍政権に入って加速されているのだ。他方、労働者はいえ、賃金は押さえ込まれ、消費税で追加収奪も強化されてきた。かつての分厚い「中流層」は痩せ細り、格差社会が格段に深まっているのが実情だ。

消費税増税と法人税減税をはじめとする各種の富者・大企業優先の税制改定が、こうした結果をもたらしたのだ。消費税の性格とそのあからさまな効果が現れてきたわけだ。こうした現実を作り出した法人税減税と消費税増税、単なる価格現象だと受け流してすむ話ではない。

こうした資本制社会の傾向を考えれば、労働者や庶民は、結局最低限の生活水準に落とされる。それが資本制社会の必然的傾向だとすれば、賃上げや税金を巡る闘いは無駄な努力となる、という言説のことだ。「消費税「コミコミ論」も、こうした「宿命論」の一変種といえる。

たしかに賃金闘争を闘っていけば労働者はいつかは資本

律に同額を課す租税で、逆進税の最たるものだ。消費税も、同じ商品を買う限り、富者も貧者も同額の税を納める。実際は、購入する商品のランクも購入量も違うから納税額は差がつくにしても、基本的な性格は人頭税と同じだ。だから消費税の逆進性が指摘されてきたのではなかつたか。人頭税をやめても別の重税を押しつけてくるから結果は同じだ……。原氏の主張に沿って考えれば、消費税の逆進性という性格は、もの見事に消されてしまう。

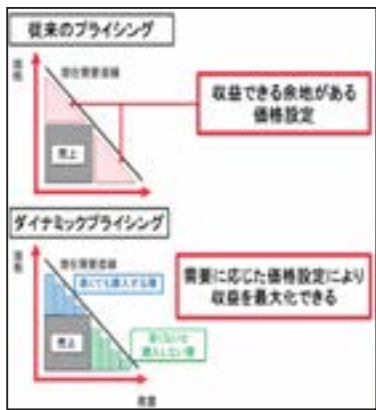
◆「ダイナミックプライシング」の効果？

原氏は最近増えてきた「ダイナミックプライシング」に注目する。要するに、人工知能を活用することで需要に合わせて価格を弾力的に変えていく手法のこと。米国の航空会社が導入し、その後、スポーツや音楽コンサートで広がっている。そうした各種のチケット販売では、対戦成績や座席の位置、売れ残り具合などで、価格は毎日、毎時ごとに変わっていく。結果的に、価格を操作することによって総額では高く売れたり、売れ残りをなくすことができる。要するに、需要と供給をマッチングさせる技法の一つだ。身近な場面で考えれば、スーパーやコンビニの賞味期限切れ商品の値下げや閉店前値引きも、意味合いは同じだ。

その「ダイナミックプライシング」に注目する原氏は評価を下す。需要などの様々な変数を算するから、消費税率の変更をあまり意識しないで価格が決まる。「いはば『消費税後決め方式』。これが広く普及すれば『消費税は景気に影響する』などとは決めつけられなくなるだろう。消費者物価指数ひとつでインフレデフレだと一喜一憂しなくなるかもしれない。」

……うーん、なんと苦しい論理展開。

「ダイナミックプ



◆「コミコミ論」は「宿命論」

原氏は「消費税「コミコミ論」という「新発想」への「転換」をアピールしているが、「コミコミ論」は、すでに以前から存在している。

資本制社会では、資本・経営者は、様々な環境のもとで様々な手法をこらすとはいえ、基本的な指向は、常に労働者の賃金をはじめとするコストを最低限に抑え、最大利潤をめざす。いったん余儀なくされた賃上げの場面でも、次の局面ではその挽回を図る。賃金の額面ばかりでなく、インフレなどによる実質賃金の引き下げもその一つだ。結局、賃金は、労働者の生活を維持する最低限の水準に押さえ込むという圧力にさらされ続ける。

のくびきから解放される、ということはない。賃金は労働による生産で新たに生み出された価値額の一定割合でしかなく、限度がある闘いなのだ。

それでも賃金闘争は無駄ではない、というのが、私たち労働者の基本的なスタンスだ。賃金を巡る闘いは、労働者と資本家の間の攻防の舞台。税制についても同じだ。政府を間に挟んだ「再配分」を巡る闘いの土俵なのだ。

賃金でも税制でも、それを巡る闘いは勝つたり負けたりで、押し込まれることも多い。しかしそうした土俵での闘いを通じて、労働者は成果を上げることができ、団結して闘うすべも鍛えられ、より長期的で大局的な戦略目標を立てることも可能になる。

ここまで原氏の言説に反対してきたが、実は、原氏の提言は全面的に間違っているわけではなく、物事の一面を指摘しているのも確かだ。ただ、その一面を恣意的に膨らませすぎではないけない。

消費税「コミコミ論」などの「宿命論」に對置すべきは、労働者は、賃金や税金など資本主義の個々の結果に対する抵抗だけでは不十分であること、根本的な原因の除去、資本制社会その

『マルクスとエコロジー』 —資本主義批判としての物質代謝論— 岩佐茂氏・佐々木隆治氏編著

(Núξ (ニクス) 叢書2) 堀之内出版 2016年6月刊行



マルクスにとってエコロジーとは、既に終わった、単なる些末的なトピックにすぎなかったのか。世界最先端の研究結果により見えてきたマルクスのエコロジーへの関心は、『資本論』から一層進んだ資本主義批判の理論に深く関わる大きな意義があった。そしてマルクスを読み解く鍵は「物質代謝」の思想であり、マルクス思想の全貌はこれから明らかにになる。晩期のマルクスの研究を知らずに、知ったかぶってマルクスを語ることはなかれ！

本書の実質的な編著者である佐々木氏は、あとがきで自分の大学入学時の「マルクス葬送」の流行に触れて、「それに対抗する側も、旧態依然としたマルクス理解に固執するか、現代思想などを背景とした『新しい読み方』を提示するだけであつた。要するに、マルクスそれ自体は研究されて尽くされておいて、その思想の内容は自明であるという暗黙の前提が存在」していたと述べた。まさに不肖の私なども、その傲慢な立場だったのである。

しかし佐々木氏は本書を読んだ読者であれば「そのような前提がたんなる思い込みでしかなかつたことを直ちに了解

は、既に関心を持って読んできたマルクスのエコロジーへの関心は、『資本論』から一層進んだ資本主義批判の理論に深く関わる大きな意義があった。そしてマルクスを読み解く鍵は「物質代謝」の思想であり、マルクス思想の全貌はこれから明らかにになる。晩期のマルクスの研究を知らずに、知ったかぶってマルクスを語ることはなかれ！

第二章 マルクスと自然の普遍的な物質代謝の亀裂
第三章 持続可能な人間の発展についてのマルクスのヴィジョン

第一部 経済学批判とエコロジー

第一章 経済学批判体系における物質代謝論の意義

第二章 資本の弾力性とエコロジー論

第三章 資本主義的生産様式における「自然の無償性」とは何か？

第三部 新MEGAとエコロジー

第一章 「フリース抜粋」と「物質代謝論」の新天地

第二章 マルクスと発展した資本主義的生産における社会物質代謝の絶え間ない破壊

第四部 第一章 マルクス『資本論』における技術論の射程—原子力技術に関する理論的考察

第二章 マルクスの資本主義に対するエコロジー的批判と二一世紀の食糧危機—過少生産論に対する批判的検討

あとがき
参考文献

このように本書は、米田・日本・ドイツ・韓国の著者による各項目の論文集、すなわち新MEGAの『資本論』草稿類と抜粋ノートに関する国際的な研究論文集なのである。

紙面の関係から、本書を代表する論文として、ここでは第二部「経済学批判とエコロジー」中の第一章「経済学批判体系における物質代謝論の意義」を取り上げ、お許しいただきたい。もう一人の編者である岩佐氏も、この論文については「マルクスの経済学批判の核心はなによりも物象的な経済的形態規定と素材的世界における物質的代謝との絡み合いに存する。それゆえ、これまで経済学批判において注目されてきたものが少なかつた物質代謝概念に注目し、その意義について考察した」ものだと高い評価を与えている。

佐々木氏は既に2011年の処女著作『マルクスの物象化論』において、「マルクスの経済学批判の核心が物象的な経済的形態規定と素材ないし物質的代謝との絡み合い」であり、マルクスを「素材の思想家」だと指摘している。だがその著作では物象化に力点が置かれ物質代謝の意義については展開できなかった、とこの論文執筆の経緯を書いている。

まず佐々木氏は、表題の物質代謝を一段と適切な素材代謝

と言ひ換えた。そもそもこの概念は、生物体の内部における物質の化学変化を示す物であつた。そして農芸科学者のリビッチは外界から摂取した物質を体内で結合・分離することで生命活動が維持されることを重視し、名付けたのであつた。その後、個々の生命体の栄養摂取・排泄ばかりでなく、一般化されて環境との相互作用等、さらに自然科学だけでなく、社会科学、生産と分配そして消費の循環的かつ有機的な人間活動を扱う経済学においても使用されるに至る。マルクスは、リビッチから直接にはなく、友人の医師のダニエルスからこの概念を知つた。

こうしてマルクスは、資本主義的生産様式においては人間達の振る舞いによって特定の経済的形態規定(価値)が絶えず再生産され、この経済的形態規定が素材の世界を再編し、社会的素材代謝にとどまらず自然的素材代謝にも大きな影響を与えると気づいたのである。

資本主義下の私的生産者は、生産物に価値という社会的力を与え、商品・貨幣等の物象とし、これらの力に依存して互いに関係を取り結ぶ他はない。このように資本主義下では生産関係が人格と人格との関係で

は、既に関心を持って読んできたマルクスのエコロジーへの関心は、『資本論』から一層進んだ資本主義批判の理論に深く関わる大きな意義があった。そしてマルクスを読み解く鍵は「物質代謝」の思想であり、マルクス思想の全貌はこれから明らかにになる。晩期のマルクスの研究を知らずに、知ったかぶってマルクスを語ることはなかれ！

の私的所有を基礎にして資本主義的生産関係を把握したのではなく、マルクスは私的労働と賃労働という特殊な労働形態から出発してそれを把握したことにあつた。そのことはマルクスが社会把握の基礎に素材代謝を置いていたこと、さらに労働とは根本的には自然と人間との間でのまさに素材代謝の媒介に他ならないと認識していたからなのである。

マルクスの経済学批判の問題意識は、旧来の経済学が形態規定と素材とを癒着させることにより経済的形態規定の固有性、さらには資本主義生産様式の歴史的特殊性を把握できなかったばかりでなく、素材代謝の具体的論理を捨象し極めて抽象的にしか素材の論理を把握することが出来ず、したがって旧来の経済学が素材代謝の様式を一面的にしか把握できていないことに対して向けられていたことである。これがマルクスが素材の思想家といわれる所以である。

翻つて私達はこうしたマルクスの問題意識を共有していただろうか。まさに共有していなかった。マルクスのアソシエーション論もこの文脈において、つまりアソシエートした自由な諸個人が労働配分や生産配分の在り方を規制するだ

けでなく、こうした自由な人間達が持続可能な仕方でも自分たちの人間性に適合する仕方、人間と自然との素材代謝を制御する社会だと認識しなくてはならないと佐々木氏はこの論文で強調している。

最後に本書の第四部第一章において、「マルクス『資本論』における技術論の射程—原子力技術に関する理論的考察」で興味深い事を述べていることにも注目しておきたい。

本書は4千円に迫る値段ながら、一読に値する本である。是非にと読者の皆さんへお薦めしたい。(直木)

『植民地朝鮮と日本』趙景達著(岩波新書)

●はじめに

一般に朝鮮の植民地支配の歴史は三期に区分されます。第一期は「韓国併合」に始まる「武断統治」の時代。第二期は「三・一独立運動」をきっかけに「文化政治」に転換し「重化学工業化」に至る時代。第三期は「日中戦争」から「太平洋戦争」にかけての「総力戦体制」のもと「徴用工」「慰安婦」が問題となる時代です。

著者の趙景達(Gyo Kyungdan)は、これらの各ト(「慰安婦捏造説」に、客



観的に反論するためにも有意義な良書と言えます。

●武断統治

第一章「日本の軍事支配」では、朝鮮総督府と憲兵警察制度の設立により、義兵闘争に対する大掃討作戦が行われ、言論弾圧により「新民会」も解散に追い込まれます。さらに憲兵警察主導で「土地調査事業」「林野調査事業」が強行され、「東洋拓殖株式会社」が最大の地主となります。

朝鮮に食糧生産地の役割を担わせるため、「武断農政」のもとで米を日本人の嗜好に合うよう品種改良させ、棉花・養蚕・果実・畜牛などの指導を推進します。また朝鮮農業に工業の原材料供給地の役割を担わせるため、棉花栽培協会を設立し陸地棉花栽培を推進し、日本の紡績工業を支えます。

朝鮮を食糧・原材料供給地として押し止めるため「会社令」により会社設立を制限し、その結果、朝鮮人会社の設立は抑えられます。また主に軍事目的の鉄道や道路を整備するため、強制収用により多くの農民が田畑や家屋を失います。

成するため、日本語を普及し同化教育を推進します。地方行政においても、行政区画を総督府の支配が貫徹しやすいよう再編します。

こうして、武断統治の時代、朝鮮民衆は政治・産業・教育・地方行政の主体から徹底して排除され、怒りは鬱積してゆきます。

●文化政治

第一次世界大戦の終結に際して、アメリカのウィルソンの提唱した「民族自決主義」は、朝鮮民衆にも大きな勇気を与えます。一九一九年三月一日、京城のパゴダ公園で学生代表が「独立宣言文」を朗読すると、「大韓独立万歳」が高唱され、数万名の示威行進が繰り広げられます。この「三・一独立運動」は全国に広まり、武断統治期に蓄積した民衆の怒りが噴出します。

これを機に武断統治の限界を感じた日本政府は、憲兵警察制度の廃止や地方制度への参加など「文化政治」への転換を余儀なくされます。言論・出版の自由を認めると同時に「親日派」の育成を行います。

これに対応し民衆の側からも「実力養成運動」という改良主義的運動が起こり、「民立大

学設立運動」や「物産奨励運動」、「自治運動」へと発展していきます。それはさらに、天道教やキリスト教の運動、女性運動、旧戡民(白丁)の衡平運動、農村運動、生活改善運動、帰郷学生会のウ・ナロード運動などへ、裾野を広げていきます。

一九二二年になると「朝鮮共産党」が設立され、コミンテルンの影響のもと、労働運動・農民運動を組織しますが、総督府によって弾圧されます。社会主義者と民族主義者との共同戦線が追求され「新韓会」が組織されます。

国外においても満洲における独立武装運動、上海における大韓民国臨時政府の運動、日本における在日朝鮮労働総同盟の運動などが展開されます。

こうして民衆運動の激化に直面した「文化政治」は、一九三一年の満州事変を機に終焉します。「農工併進」政策のもと、農業では「南棉北羊」(南では繊維工業用の棉花、北では軍需用の綿羊)、「北鮮開拓」(森林伐採)が推進され、工業では「重化学工業化」が進められ、「日窒コンツェン」により鴨緑江の大規模電力ダムと「朝鮮窒素肥料株式会社」が設立されます。

●総力戦体制

一九三七年に日中戦争に突入すると、朝鮮は「戦時動員体制」に組み込まれ、太平洋戦争に至って、その過酷さは極限にまで達します。

一九三八年には「国民精神総動員朝鮮連盟」を発足させ、「内鮮一体」の掛け声のもと、「朝鮮教育令」改正により生徒の皇国臣民化を推進し、「創氏改名」により、「姓」基本の朝鮮の伝統的家族制度を破壊し、日本の「氏」制度に強引に組み込みます。

「皇軍」への動員は、一九三八年の朝鮮陸軍特別志願兵令に始まり、四三年には海軍特別志願兵令、さらには朝鮮人の学徒出陣にまで拡大されます。多くの青少年が戦地で犠牲になりますが、学生の反抗も激しく、志願拒否、脱走、抗日軍への合流、入営後の反乱などが起きます。

「労働動員」(いわゆる「強制連行」)は、三つの階梯をたどり、第一段階は「募集」方式で、一九三九年の「労働動員計画」により、総督府が指定した地域で企業主が募集を行います。実質は警察が人数を割り当て強制的に行われます。

第二段階は「官斡旋」で四二年に総督府が決定した「斡旋要綱」に基づき「朝鮮労働協会」が村々に割り当てた人数を村落責任者の責任で挑発します。第三段階は四四年の「国民徴用令」による法強制での徴用です。忌避や逃亡による抵抗がありましたが、約七十万人近くが炭鉱や工事現場で過酷な労働に従事させられ、強制貯金で半数以上が賃金も未払いのまま終戦を迎えます。

「軍慰安婦」の徴集も行われます。「軍慰安所」は一九三二年の上海事変以降設置されましたが、三七年の南京事件で大量虐殺と婦女暴行が問題となつてから大量設置されます。慰安婦の募集には陸軍省も深く関わっています。朝鮮では総督府が徴集された女子の身分証明書発給や移送業務を行います。

徴集は軍に指定された業者が行いますが、貧困農家出身で教育もさほど受けず就職先に窮する娘を主な対象とします。女工ということで応募した就職詐欺や人身売買、班長・区長の説得による半強制、巡査・憲兵による拉致も少なくなつたと言われます。彼女たちは戦地で「性奴隷」として過酷な扱いをされます。

戦後の歴史学は、こうした歴史観を克服することに力を注ぎ、「朝鮮は内在的に近代の方に発展の道を歩んでいたが、日本によって阻害されたという、いわゆる内在的發展論が一世を風靡」します。(特に梶村秀樹の業績は重要です。)

ところが、一九八〇年代以降、それへの懐疑が生れました。「内在的發展論は、それまでの支配・抵抗の歴史を取り込みつつ、近代的な発展の道を描こうとしたのだが、近代日本の民族主義・国家主義を指弾する一方で、朝鮮の民族主義を鼓吹するものであったからであ

●問題提起

ところで、この『植民地朝鮮と日本』は『近代朝鮮と日本』の続編として執筆されています。趙景達は両書を通じて朝鮮史のあり方に、独自の問題提起を投げかけています。以下は、両書の「まえがき」の中から要約しつつ引用します。

戦前の日本は、朝鮮植民地化を正当化するため「朝鮮の歴史を停滞的、他律的と見る歴史観」、「朝鮮は自力では近代化できず、日本が助けてあげなければならぬ」という手前勝手な植民地史観」を流布しました。

戦後の歴史学は、こうした歴史観を克服することに力を注ぎ、「朝鮮は内在的に近代の方に発展の道を歩んでいたが、日本によって阻害されたという、いわゆる内在的發展論が一世を風靡」します。(特に梶村秀樹の業績は重要です。)

ところが、一九八〇年代以降、それへの懐疑が生れました。「内在的發展論は、それまでの支配・抵抗の歴史を取り込みつつ、近代的な発展の道を描こうとしたのだが、近代日本の民族主義・国家主義を指弾する一方で、朝鮮の民族主義を鼓吹するものであったからであ

る。」(近代そのものを相対化する視点が提示されます。)

これに対し提起された「朝鮮近代化論」や「朝鮮近代性論」についても、趙景達は批判しつつ(内容は省略)、次のように問題を投げかけます。

「内在的發展論は、先鋭な近代日本批判を展開したが、朝鮮と日本との同質性を前提としており、近代日本が批判されるべきなのは、朝鮮の内在的な近代化を阻害したからだということにしかない。朝鮮近代

史研究では近代の呪縛から逃れることは容易ではない。」と指摘します。

「では、近代を相対化しようとするなら、どのような歴史認識が必要か」と問い、「そこで着目したいのは政治文化である」と提起します。「政治文化とは、政治や抗争が行われる際に、その内容や展開のあり方などを規定する、イデオロギー、伝統、観念、信仰、迷信、願望、慣行、行動規範(ルール)など」であると規定します。

その上で、趙景達は「儒教的民本主義」に着目します。詳しい展開は省略しますが、武断統治の破綻した要因、社会主義が民衆に受容された要因、朝鮮共産党や臨時政府が派閥抗争に終始した要因などについて、これまでの「内在的發展論」では必ずしもうまく説明できていなかった問題が、「儒教的民本主義」の視点を通じて、ある程度説明できているのは確かでしょう。(その当否は、今後多くの論者によって、検証されて

いくでしょう。)

このように、趙景達の『植民地朝鮮と日本』は前著『近代朝鮮と日本』と合わせて、最新の客観的資料を踏まえ「歴史修正主義」に対する実証的批判に有用なテキストであると共に、梶村秀樹らが切り開いた「内在的發展論」をさらに批判的に継承・発展させるべく問題提起の試論としても、必読に値すると思います。

(松本誠也)

ノモンハン・南京・桂林

ノモンハン

8月15日に南京訪問することがここ数年の習慣になっています。中国の戦跡訪問、フィールドワークなのですが、この暑い最中の行動にどのような意味があるのだろうか。加害者側の立場にある私の慰霊の旅など自己満足には

何でも紹介

8月15日に南京訪問することがここ数年の習慣になっています。中国の戦跡訪問、フィールドワークなのですが、この暑い最中の行動にどのような意味があるのだろうか。加害者側の立場にある私の慰霊の旅など自己満足には

9月8日、神戸新聞がノモンハン事件の記事を掲載しました。一九三九年五月から九月、日本軍が暴走して旧満州とモンゴルの国境をめぐるノモンハンでソ連軍に無謀な戦闘を仕掛けた事件です。記事はそのありさまを、次のように伝えています。

「計4万人以上が死傷した現地には今も爪痕が残る、不利な戦いを強いられた元日本兵や遺族は体や心に傷を抱える。日本が対ソ開戦を諦めて南進政

策に転じ、太平洋戦争に向かうきっかけとなった事件を振り返った」

すでにこの時期に彼我の戦闘能力の違いを無視し、「楽観的な見通しで戦闘を継続し、精神論を強調して兵站を軽視」していました。何しろソ連軍は戦車を中心なのに、「一線の日本兵は火炎瓶を片手に戦車に向かうしかなく、多くの戦死者が出た」

生き残った兵士、柳楽林市さん(102)歳のインタビューも掲載されています。今や戦場での経験を証言できる元兵士は少なくなっており、柳楽さんの証言にもあるように実に「ひどい話」です。



中華門、三層構造になっている



南京紀念館「遇難者300,000」とある

本土からの圧力が、学生や市民の抗議行動を過激化させていることには触れていないようでした。中国はどこへ行くのか、香港の明日はあるのか、暗い気持ちになります。

翻って日本はどうでしょう。一見、法の支配が機能しているようで、警察は巧妙に合法性を装い、司法に守られて暴力を行使しています。国家がウソと排外で国民を組織しようとしています。監視カメラの増殖という点でも、中国とさして変わらぬように思います。

さて、南京は城壁に囲まれ多くの門がありますが、何一つても中華門の威容にはため息が出ます。老門東はその東側に出来た観光地のようなところ

です。南京済慈慰安所旧址陳列館は以前は半分壊れたような建物でしたが、今は整備された「慰安所址」として管理されています。

南京侵華日軍南京大屠殺遇难同胞紀念館では15日の朝、平和集会式典に参加し幸存者の証言を聞きま

す。最近では国旗掲揚とかもありません。正式な式典は12月13日に行われ、2014年から国家公営となつてい

ます。南京民間抗日博物館は呉先斌さんが設置しているもので、規模が大きく

情勢分析なき精神論、兵士を消耗品として使い捨てる作戦を当然としてきた大日本帝国の興亡が、このようにあらゆる局面で内外におびただしい犠牲を強いてきました。明治の初め、木戸孝允は「速に天下の方向を一定し、使節を朝鮮に遣し、彼の無礼を問ひ、彼若し不

服の時罪を鳴して其の土(國土)を攻撃し、・・・(同書)と言いましたが、中国には「暴支膺懲」という言葉があられました。参院選後の安倍内閣改造で防衛相に転身した河野太郎前外相が韓国に対して「無礼」と言い放ちましたが、それは、150年この国は何も変わっていないということ暴露したものです。ちなみに、アメリカやイギリスは「鬼畜米英」だったので

は徐州へ、その前は拉孟・騰越へも行きました。しかし、それは細切れの知識としてあり、結びつけひとつながりのものとして十分把握できていません。大陸打通作戦(1号作戦：中国大陸の米空軍基地の覆滅・大陸打通・国民党政府の撃破など)はそれらを結びつける鍵なのかと思います。どんなに大量の兵士を送り込んでも所詮は点と線に過ぎず、消耗戦に敗れて8・15へとたどり着いた

徐州は南京の北にあり、徐州作戦は南京占領後の1938年に行われましたが、台兒莊では手痛い敗北を喫しています。中塚明氏は前掲書において次のように記しています。「38年はじめ日本軍は華北



挾江門、「南京市人民政府1985年8月」とある

徐州は南京の北にあり、徐州作戦は南京占領後の1938年に行われましたが、台兒莊では手痛い敗北を喫しています。中塚明氏は前掲書において次のように記しています。「38年はじめ日本軍は華北

徐州は南京の北にあり、徐州作戦は南京占領後の1938年に行われましたが、台兒莊では手痛い敗北を喫しています。中塚明氏は前掲書において次のように記しています。「38年はじめ日本軍は華北

徐州は南京の北にあり、徐州作戦は南京占領後の1938年に行われましたが、台兒莊では手痛い敗北を喫しています。中塚明氏は前掲書において次のように記しています。「38年はじめ日本軍は華北

という思いが交錯します。

成されたのである」と、微妙な記述となっている。

すでに制空権はなく、もちろん制海権もなく、「一応、確保された交通路を維持するすべ

すでに制空権はなく、もちろん制海権もなく、「一応、確保された交通路を維持するすべ

すでに制空権はなく、もちろん制海権もなく、「一応、確保された交通路を維持するすべ

桂林で河を下り、羅善学さんに会う(16日、19日)

桂林には若干の不純な動機(河下り観光)もあって行ったのですが、そこにも日本軍の爪痕がありました。長沙からさらに南にあり、その先に仏印へのみちがあります。ワールドワークノートには「第11軍は衡陽から湘佳線沿線を南下し

て(1944年)11月10日に桂林・柳州を攻略、一部はさらに貴州の独山を占領した。広東から南部○漠線にそって西進した第23軍は第11軍と同日に桂林・柳州を攻略したのち、12月24日南寧を攻略

さらに北部仏印から鎮南関の国境を越えて北進してきた第21師団と合流し、ここに中国大陸から仏印を通り、南方圏に通ずる陸上交通路が開通し、大陸打通の目的は一応達

た。白色テロ(1947年「台湾2・28事件」)で家族を殺された。自身も弾圧を受けた夫妻との対面は劇的でした。当時、「セデック・バレ」という台湾の長編映画を観た直後で、その舞台となった霧社にも行くこと

あつて、興味深い思いで参加した。そして、霧社事件・原住民蜂起の首領モーナ・ルダオ像に面会し深い感銘を受けました。今年もまた皇軍が侵略した道筋をたどるワールドワークに参加し、夏の暑い時期に中国を訪れました。それは、なかつたことのされようとして

この国の歴史の一面を訪問する旅です。日本と中国の過去と現在、そして未来について想いをめぐらしてください。(折口晴夫)

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように

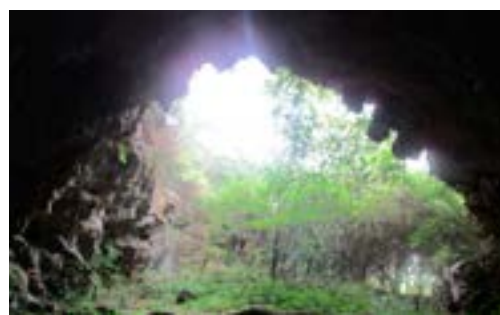
馬埠江村見学では、80歳を超える陽振珠さんの案内で洞窟(白骨洞)まで行き、兄の陽振球さんはここに来るのはつらいと言いながら、次のように



桂林



羅さん(左側)から話を聞く



白骨洞



四行倉庫



上海バンド(外灘)にて

エイジの沖縄通信

N067

今、必要なのは防衛費ではなく防災費だ！

今までの台風銀座通りといえ、南の島・沖縄であった。

それが、今では「九州」や「東日本」が台風の銀座通りになりつつある。やはり地球の温暖化が深刻になっている影響だと思える。

私も沖縄生活で「沖縄台風」を幾つか経験したが、本土の台風とは段違いでそれは凄かった。ヘタをすると2日も3日も外に出られなくなる。

その「沖縄台風」で知った用語が「けし風」（返し風）である。

本土の台風は、通り過ぎれば次の日は「台風一過」で晴天になる事が多い。ところが、沖縄の台風はやっと通り過ぎて、やれやれ静かになったと思いきや、また台風が来たのか？と思うほど、「けし風」（返し風）が凄い！

でも、沖縄の皆さんの「台風慣れ」と言うか、台風に対する「対応能力」（食料の買いだめとか）にいつも感心させられました。

前置きが長くなりましたが、今の日本社会が直面している大きな課題が「自然災害」（豪雨台風、等）問題である。「想定外」とか「今まで経験したことのない」という言葉はもう通用しない。

9月の台風15号は千葉県等に大規模停電をもたらした。そして台風19号が東日本全域を直撃して、堤防の決壊が7県

71河川135カ所に及び、死者行方不明者が90人以上、けが人も400人以上、住宅6万棟以上が浸水した。さらに、台風21号と低気圧は東日本に記録的な大雨をもたらし被害が増大。

東京新聞に被害者の声が載っている。千葉県の人は「最悪の年だよ。これだけの災害が自分の身に降りかかるとは想像していなかった」と。避



難した人からは「氾濫せず無事だったが、本当に怖かった」「強い風雨で防災無線がまったく聞き取れなかった」「深夜に自治体から高齢者避難のメールが何度も来たが、もう遅いと思った」等々。

防災の専門家の方々は「これまでの常識や経験だけに頼らず、危機感のハードルを下げ自分の命を守ってほしい」と警鐘を鳴らす。

「戦後70数年、ひとまず日本は戦争を経験しなかった。その一方でこの国は、ほぼ毎年、何らかの大災害に遭遇している。・・・国の最大の責務が『国民の生命と財産を守る』ことであるなら・・・しかるに予算配分はどうか。19年度の防衛予算は過去最高の5兆2600億円。防災・減災・国土強靱化対策を含む防災関係予算は1兆3500億円、前年度の補正予算をあわせても2兆4000億円だ。防衛予算のたつた半分。これ、逆じゃありません？・・・災害大国であることを思えば、防衛省を防災省に、自衛隊を災害救助中心の隊に再編したっていいくらいである」と。

安部首相は官邸で開いた非常災害対策本部会議で、「救助活動に全力を挙げ、被災自治体などと緊密に連携し、ライフラインの復興や被災者の生活支援に迅速に取り組んでほしい」と出席閣僚らに指示したと言

確かに「豪雨救助に全力」を上げて取り組んでほしい。しかし、「堤防の整備もまた、後手後手に回っていることは明らかであろう。東京五輪を迎える首都圏に投入される資金と労力とは対照的に、日本各地の人々の暮らしている脆弱な条件に置かれている」と、その危険性を宇野氏は指摘している。

自衛隊(日本軍)の独自行動と存在感を強める中東派遣

安倍政権は10月18日、中東情勢の安定と日本に関係する船舶の安全確保を理由に、情報収集の強化を目的とし、防衛省設置法に基づく「調査・研究」を根拠にホルムズ海峡周辺のオマーン湾など中東への自衛隊派遣を検討することを決めた。

ホルムズ海峡周辺では、米国のイラン産原油の全面禁輸を開始した5月以来、石油タンカーなどが攻撃を受ける事案が続発し、6月、日本の海運会社が運航するタンカーなど2隻がホルムズ海峡付近のオマーン湾で攻撃された。

石油タンカーのみならず、9月にはサウジの石油施設が無機などで攻撃を受け、内戦中のイエメンでイランから支援を受ける反政府武装組織フ

シが犯行を認めた。10月にはサウジに近い紅海でイランのタンカーで爆発が起きるなど、いずれも攻撃主体ははっきりしないが、米国の

サウジなどは「イラン犯行説」を主張し、米国は有志連合を結成する方針を表明し日本に参加を求めている。

イランも独自に「ホルムズ平和構想」を打ち出して、米側と対立が深まるという構図が繰り返されている。

早ければ来年1月の派遣が見込まれる中、「調査・研究」名目で情報収集をする為のことだが、根拠となるのは防衛省設置法4条の規定だ。

1954年の防衛庁設置法の施行当時からあり、首相や国会の承認は不要で、防衛相の判断だけで派遣が可能だ。

「関電ソロソロ」

9月26日の報道以降毎日、関電の見出しが新聞紙面に踊っています。まるでこれまで溜めに溜めていた汚泥が溢れ出し、そこから原発マネーを喰らったゴキブリがぞろぞろ現れています。名指しでもらった金品を報道され、この人たちは恥ずかしくないのかと思いますが、そんなこととは無縁な世界に生きる人々たな

9・11以降、多くの電力会社に対して「再稼働反対」の抗議行動が続けられていますが、関電に対しては「関電行動」があります。私は毎週金曜日11時から、関電本店前に行くようにしています。

10月4日は朝から関電は正面玄関(通用口)を閉鎖していました。恥ずかしくて門を閉ざしているのか、それとも招かれざる客の来訪を拒否しているのか、どちらにしても居座り

関電の対応は頭隠して尻隠さず、日替わりでどんどん悪事が暴かれつつある。これらは原発稼働に固有の現象と思われ

10月9日の八木会長らの辞任表明によって一段落の感があるかのようにですが、問題はこれからです。11日の金曜日、昼休みデモかと思えますが全労連が関電デモを行い、その後抗議文を届けに来ました。ところが、関電の社員は出てきません。嫌なことは下請けに押し付けるといういつもの手で、警備に「追いつき」仕事を押し付

読者からの手紙



保の現場も取捨がつかないなかでNHKを巻き込んだ悪事の隠蔽も露見した。何ともお

寒い限りだが、資本主義そのものが根腐れをおこし、教師間の陰湿な虐めさえ見過ごされ、N国党首は他国の人々・子どもたちを公然と蔑み殺せという。神戸新聞は10月4日の社説でこれを適切にも「国会は炎上商法を許すな」と指摘したが、その本家が安倍自公政権だとは書かないところがあと一歩と

そうしたい危うい均衡の下で若狭の原発は稼働してきて、その危うい均衡が破綻し、関電は危機に陥っています。原発を動かし続けようとしている勢力は、この危機を関電トップの首きりで終わらせようとしているのです。原子力マフィアは巨象。関電行動はその足に刺さる棘といつたところです。(晴)

